



風が強すぎる。ぼくは、よろけそうになる足をふんばりながら、雄成ゆうせいに話しかけた。

「台風は遠くに行っちゃったんだよな。どうしていつまでも風が強いんだろう」

「そんなのわかんないよ」

首をひねった雄成のかわりに、あぐり先生が答えた。

「この強い風は、台風の吹き返しなのよ」

「吹き返し？」

「これまでとは逆さかの向きに風が吹くことをいうの」

あぐり先生は、農道に落ちていた小枝こえだを拾うと、地面の上に、時計の針はりの動きと反対周りに渦巻きうずまを描いた。さらに、渦巻きの中心を横切るように、すっと線を引いた。

「この小石が、今、みんなのいる場所だと思ってね」

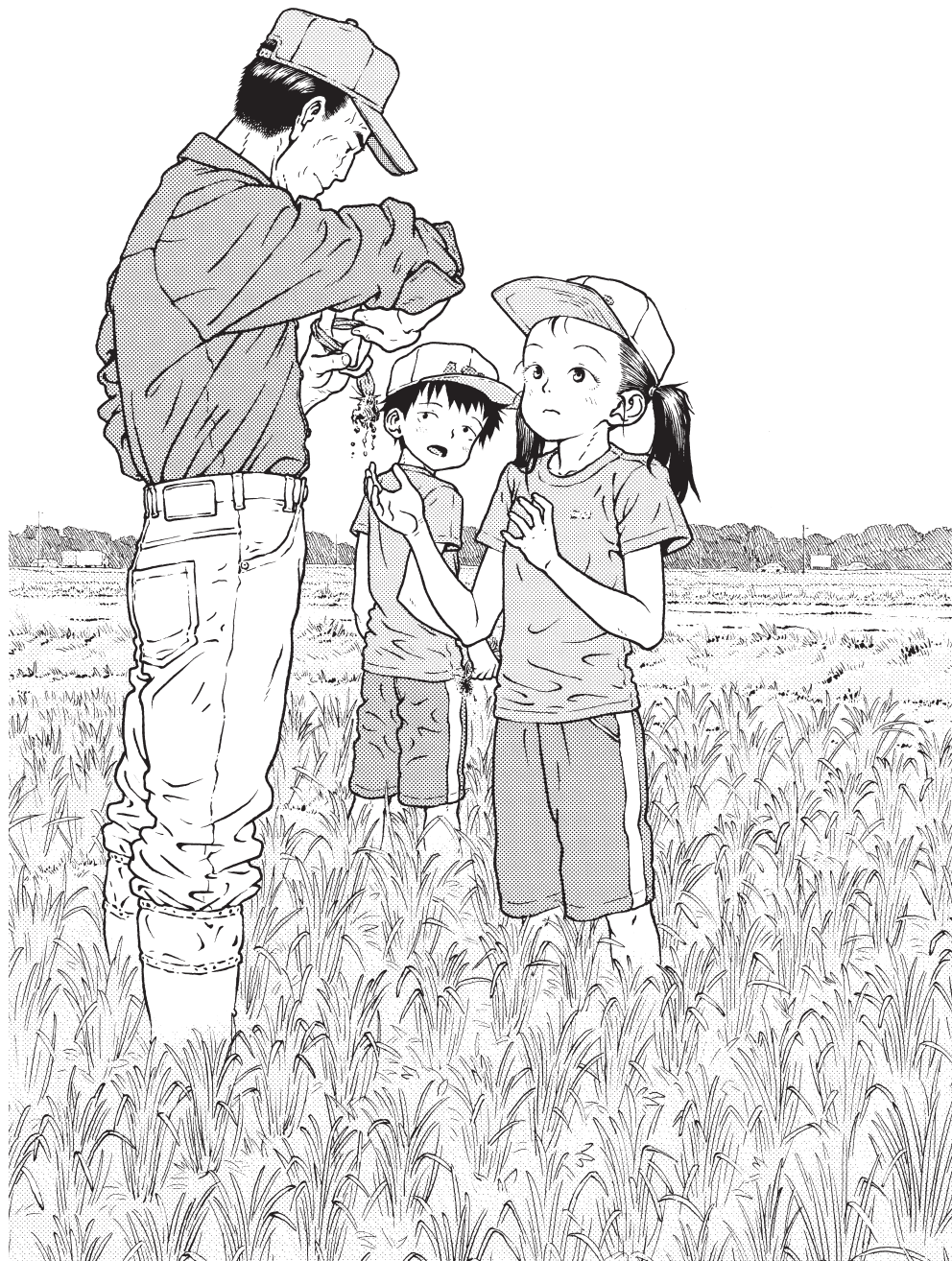
手に持った小石を、渦巻きの中心に引いた線の上に置き、右はしから左へとずらし  
ていく。すると、はじめは南から当たっていた風が、台風が通り過ぎすると北風に変わ  
るのがわかった。

「ふうん、吹き返しって、こういう仕組みで起きているのか」

奈々が、ぼくの耳元でささやいた。  
「もう、学ったら、にぶいわね。美代さんが大好きな青田風を写真にしてプレゼントするつもりなんだよ」  
雄成を、いつもやさしく見守ってくれる美代さん。あいつったら、大好きな美代さんのために、写真をとり続けているんだ。  
ひたむきな雄成の姿に、胸の中がほんのり温かくなった。  
「吹き返しも、だいぶ弱まってきたようね」  
あぐり先生が周りを見回しながらそうつぶやくと、美代さんがはたと手をうった。  
「んではいっそ、ここで、お昼にしたらいいんでねえの？」  
「うわあ、それいい！ ぜったい、いい！」  
ぼくたちは、体をはずませていた。美代さんには、これまで、ゴギョウ餅や笹ちまき、焼きみそおにぎりなど、手づくりのごちそうを差し入れてもらった。ぼくたちの大好きなピザとかパスタとはぜんぜん違うけれど、しっかりと胃袋をつかまれている。







へえ、すごい。雑草と人間の知恵比べみたいだ。

けれども、草取りが本格的に始まると、感心してばかりもいられなくなった。

田んぼの泥の中を歩くのは、田植えの時代以来だ。少しはなれた気がするけれど、泥に足をとられ歩きづらい。泥の中に根を張った草を引き抜くのはけっこう力があるうえに、抜いた草を泥の中にねじ込む作業まで加わる。

草取りって、田植えより大変かも……。そう思ったとたん、田んぼの広さがずっしりとのしかかってくる。

とつぜん雄成が「あれ？」と声を上げた。

「変だな、さかさに見ると、田んぼが縮む……」

とたんに、あぐり先生が笑みをこぼした。

「すごい！ 雄成君、いいところに気がついたわね。ようし、みんなで両足の間から世界をさかさに見てみましょう」

「それって、股のぞき？」

ぼくが言うと、奈々が顔をしかめた。

「でしょ？ だから、迷<sup>まよ</sup>ったり壁<sup>かべ</sup>にぶつかったりすると、アオサギに聞くのよ。『老<sup>ろう</sup>師<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>、わたしはどうしたらいいですか？』って。すると、ちゃんと、答えが返<sup>かえ</sup>ってくるの」

ぼくも奈<sup>な</sup>々<sup>な</sup>も雄<sup>ゆう</sup>成<sup>せい</sup>も、思<sup>おも</sup>わず身<sup>み</sup>を乗<sup>の</sup>り出<sup>い</sup>す。

「何<sup>なに</sup>て？」

「自分の頭<sup>あたま</sup>でとことん考え<sup>かんが</sup>えろって！」

そう言う<sup>い</sup>と、あぐり先生<sup>せんせい</sup>は「うふふ」と楽<sup>たの</sup>しげに笑<sup>わら</sup>った。

田<sup>い</sup>んぼの中<sup>なか</sup>を、白<sup>しろ</sup>いサギ<sup>さぎ</sup>たちがエサ<sup>えさ</sup>を求<sup>もと</sup>めて歩<sup>あ</sup>く。緑<sup>き</sup>の中<sup>なか</sup>を動<sup>うご</sup>く純<sup>じゆん</sup>白<sup>はく</sup>が、目<sup>め</sup>にしみるように鮮<sup>あざ</sup>やかだ。ぼくは、アオサギ<sup>あおさぎ</sup>に目<sup>め</sup>を移<sup>うつ</sup>した。相<sup>あ</sup>変<sup>へん</sup>わらず、そ<sup>そ</sup>こだけ時<sup>じ</sup>間<sup>かん</sup>が止<sup>と</sup>まったように、びくりとも動<sup>うご</sup>かない。

頭<sup>あたま</sup>の中<sup>なか</sup>に、茂<sup>しげ</sup>さんの言<sup>い</sup>葉<sup>は</sup>がよみかえった。

「みんな、未<sup>み</sup>来<sup>らい</sup>の科<sup>か</sup>学<sup>がく</sup>者<sup>しや</sup>なんだべ？」と言<sup>い</sup>われて、ど<sup>ど</sup>う答<sup>こた</sup>えたらいいかわからなかつた。

——老<sup>らう</sup>師<sup>し</sup>様<sup>さま</sup>、ぼくにはいつたい何<sup>なに</sup>ができるん<sup>ん</sup>でし<sup>し</sup>ょうか。

